# アートミーツケア学会 News+Letter
## Vol.7 2010 Autumn

CONTENTS


特集 いのちの手ざわり
ハート・アート・おかやま　ミュージアム・アクセス・ビュー　弘田陽介　里見まり子

仙台アートスペース紹介　せんだい演劇工房10-BOX　仙南芸術文化センター(えずこホール)
ハート&アート空間"ビーアイ"　せんだいメディアテーク

インフォメーション　入会のご案内　「いのちの手ざわり　アートミーツケア学会2010年度総会・大会」のご案内


Photo:アーティストと遊ぶ島の子どもたち(「白石島文化祭」にて) © 湯月洋志

アートミニマム特集

## いのちの手ざわり

日々、さまざまな情報や刺激に囲まれ生きている私たちは、その状況に慣れることと引き換えに、いろいろなものを敏感に感じとる力を失ってきているのではないでしょうか。
一方で、そのような状況に危機感を抱き、鈍った力にも強く訴えかけるような、身体を揺り起こすようなざわめきを求めているようにも思います。
今号では、島の暮らしや、異なる身体との出会いがもたらす、ざわめきの瞬間やいのちの手ざわりについて考えてみたいと思います。

# 白石島文化祭 ーいのちが循環する豊かな島

田野 智子 NPO法人ハート・アート・おかやま代表

瀬戸内海のほぼ中央部に位置する笠岡諸島は、笠岡沖から四国多度津方面に連なる７つの有人島からなる。人口約2,000人、高齢化率は59%と少子高齢化が深刻だ。しかしどの島にも、小学校中学校を存続させるべく、島づくりのNPOや公民館活動がコミュニティを支えている。
夜があける前から漁に出る男性たち。出荷されない小魚をミンチに加工する婦人部の人たち。畑の草取りや収穫作業は高齢者の仕事のようだ。子どもらも学校が始まる前から散歩をしている。運動会や祭りの準備や白石踊り、盆の行事や年末の掃除など島をあげて皆一斉に行われる。
年齢をこえて、まなざしが交差する循環型社会白石島で今年の夏、「島の文化祭」を行った。

## ハート・アート・おかやまの活動

現代社会では、かつてのようなモノにおいて成長を遂げるよりも、知性や感性、魂の深さにおいて成長を遂げることが重要な意味を持っていると考え、人と人、人と地域、人と自然が交歓し、あらゆる側面のつながりを恢復させることを活動のテーマとしている。その鍵を握っているのがアートであり、そのポテンシャルを活かすことで新しい価値を創造できる。表現においては、障害や年齢はひとつの個性となり、それぞれの自己表現から豊かな市民文化の創造が拡がる。障害ゆえに想像性の芽をもつ人、自由な発想をする子ども、自身のキャリアを生かし人生の終焉を生きている活力のある高齢者は、まさに概念をもっている人であり、その人の存在そのものがサイトスペシフィックなのである。一方、リミットを超えて新しい概念を構築していくのがアーティストの役割とすると、そもそもアートとは何かを再考しなければならない現場、新しい価値の創造の現場に遭遇することがしばしばある。これを社会の発展とともに様々な進化を遂げてきた瀬戸内の潮流に重なるところが大きいと捉え、瀬戸内海の笠岡諸島で活動している。多島美にして、一つずつ入り江に名称がある瀬戸内海。島にはそれぞれに文化があり、歴史の中で多様な価値を柔軟に受け入れてきた。ここで生まれた新たな可能性を社会に還元していくことこそが、文化の継承とクリエーションに繋がると考える。

## 島の日常をかえるアートの力

私たちが、笠岡諸島の人たちと関わり始めたのは、10年前にさかのぼる。笠岡市内の福祉施設の人たちと行ったワークショップが出会いだった。回数を重ねるうちに、「実は島出身だが、なかなか島には帰れない」という声がきかれた。ならば、船をチャーターして皆で遠足のように島に渡って、ワークショップをしてみようということになった。施設のバスを降りて船で海を渡る彼らの喜びは予想をはるかに上回った。一方、受け入れる島では、砂浜や体育館でのワークショップ、旅館での昼食などのサポート体制が整い、人々は車を連ねて彼らの送迎をした。一人ひとりが「主催者」のように動いたのだ。

それ以後、毎年夏に開催する「アート合宿」を通じ、島の暮らしや人々との交流が生まれるようになった。ハート・アート・おかやまのメンバーには、障害のある人たちも混ざっている。彼らの特徴や面白さを発見した島の人は、「だんだんの家（デイケア施設）に行ってコンサートをして」「桑の葉を摘む作業を手伝って」と、彼らも一緒に出来ることを提案してくる。少しずつ互いが歩み寄りながら、2009年には、島の空き家や畑、旅館や砂浜などでアートリンク・プロジェクトの作品展示を行った。作品を見にやってきた90歳のお婆さんが、展示空間の空き家で昔語りをはじめたり、地芝居の役者だったお爺さんが台詞を教えてくれたりと、想定外のことが起こった。

白石島公民館長の天野さんは、取り壊される家から出た古民具や写真などを「島を伝えていくもの」として収集している。和綿の織り機なども復元し、島の人や外から来た人の交流の場としている。

天野さんは、アートは専門の人のものだと思っていたという。昨年この島で私たちが展覧会をするまでは。しかし、今は「島の人の日常の中にアートの目線が加わると、島の暮らしが生き生きとしたものに変わる。アートで変わることを実感した」と。

## 大切なものを教えてくれる時間

今年の白石島文化祭は、島の人が言う「ちょっと前の時代」の島にこだわりながら、進められた。戦後の食糧難のころは、島の土地すべてが畑で木々は薪として使われ、島の御影石が白く光って美しく見えていたという。「どの岩がよく見えると嬉しい？」がらエビの皮をむきながらのお婆ちゃんとの話から生まれたのが『木を切る話し』だ。妙見信仰が残る皇国岩の雑木を切り、島の中央にある畑に運び、湯を焚き「足湯」にした。

「無花果が沢山なっとるけど、食べるのも面倒な」という声を聞き、『Barしらいし』をオープン。小エビやピーナッツとともに島のメニューにした。「餅つき歌」を歌うために餅つき大会も行った。

「ちょっと前の白石島」をみんなで思い出すために、40年前の新造船の進水式の８ミリ映像や、昭和初期の写真を見た。上映会場に来た人たちは、語る、語る……。子どもたちは、滞在するアーティストらとオリジナルの影絵の上演を行った。島論会『シマポジウム』は、子どもからお年寄りまでが参加し、島の人、島の外から来た人が島の魅力を自分の言葉で語った。

ここに生きている人たちは、豊かな文化と自然に囲まれ生き生きと暮らしている。私たちは、ただアートの文脈を注いだだけだ。もともとある場所が新たな価値を創出する場所になるには他者の視点、他者との関係性こそが必要になる。島の文化祭は、まさにその機会となった。

海からやってきた多様な価値や文化を柔軟に受け入れ、原風景を後世に伝えようと生き生きと暮らす人の中にこそ新しい価値がある。ここで覚醒し、成熟していく。本当に大切なものを考えさせてくれる時間が、確かに存在していた。

「木を切る話」全景、切り出した木と作品場所の畑

島に伝わる「餅つき唄」を披露しながらの餅つき

Barしらいしでのシマポジウム　島の果実や魚を味わいながらのトーク

開龍寺での上映会「白石島の記録と記憶」

田野　智子（たの　ともこ）／NPO法人ハート・アート・おかやま代表
愛媛県松山市生まれ。小学校教諭を経て、2006年9月より現職。岡山県内の学校にアーティストを派遣しワークショップを実施したり、芸術教育の現状調査を行ったり、表現・食・文化という日常をテーマにし、障害の有無や年齢や分野を超えた人々の密接な交流から生まれる新しい価値を地域ごとの特色ある伝承文化との比較を視野に入れ展開している。讃賞プルデンシャル福祉文化賞奨励賞、日本美術教育学会奨励賞など受賞。

# 白石島文化祭に参加して

## 語られる物語

夜明けとともに、港から見える大きな岩「皇国岩」周辺の木を切りはじめた。岩が見えるように狙いをつけ、木を倒していく。 不慣れなチェーンソーから伝わる振動が、少し怖くもあり、心強くもあった。 4、5日もすると徐々に変化が現れ、島の人たちからも「岩のかたちが見えてきたねぇ」と声をかけてくれた。木を切ることは、島の風景をほんの少し変えることでもある。その風景を島の人と眺めながらいろんな話ができる場があると素敵だ。

最終的に足湯が完成し、そこへ来てくれたおばあちゃんと話していると、島の美しい風景を讃えるような古い歌を歌ってくれた。昔の思い出話も手伝って、おばあちゃんの目には当時の風景がまだ写っているようだった。

昔の景色の話をすると皆それぞれの物語を語ってくれる。そういった個人の物語をひとつひとつ聞いていくことで、島をまた違う角度から感じることができたような気がした。

『木を切る話』作品となった足湯に集まってきた島の人たち

丹正和臣（たんじょう　かずおみ）／1983年奈良生まれ、倉敷市在住。木彫りの犬に車輪をつけ実際に散歩をさせながらコミュニケーションをはかる「犬のさんぽプロジェクト」など、自分と他との"間"を感じさせてくれるかけがえのないものとしてアートを感じ、活動している。

## 島の生活、人との関わり

昨年、アートリンク・プロジェクトの展示が白石島に決まった時から、島に暮らす人と関わりながら作品を制作したいと思っていた。そこで出会ったのが、公民館長の天野さんや展示場所を貸してくれたふみ姉さんだ。天野さんは、僕にとって白石島の師匠。技術的なことから、人柄、島の未来を考える姿勢など、一緒に居るだけで学ぶことが多い。ふみ姉さんは、元は畑だった場所を草刈りすることを条件に貸してくれた。作業中には、何度も差し入れをしてくれた。日陰に入り、亡くなった旦那さんのことや、昔の島の風景などを語ってくれた。

滞在中は、島の暮らしに合わせ、朝5時起床。6時には働き始め、9時にはひと仕事終える。猛暑の中、天野さんから草刈り機の使い方を教わる。大量の汗をかきながら、すがすがしさと共に、島の生活に体を馴染ませるために、感覚が少しずつ変化してくような気がしていた。

島で働き、汗をかき、島で捕れた野菜や魚をおいしくいただきながら白石島ならではの作品を考える。

展示期間中は、どうしても作品が中心になってしまうが、そこに至るまでに関わった天野さんやふみお姉さんのような存在や、島の暮らしをきちんとアーティストが体験していくことに改めて魅力を感じた滞在だった。

湯月 洋志（ゆづき ようじ）／1982年広島県生まれ。2007年倉敷芸術科学大学美術学科大学院修了。アートリンク・プロジェクト参加をきっかけに2006年からNPOハート・アート・おかやまの活動に関わり始める。アーティストとして表現することと、プロジェクトチームに所属することを並行させながら、人との関わりの中での表現を模索している。



# ミュージアム・アクセス・ビュー
## 第17回創作ワークショップ「食べて、触って、色を感じる」

2002年より関西で活動している「ミュージアム・アクセス・ビュー」は目の見えない人、見えにくい人とともに、気軽にアートを楽しむグループです。
主な活動は、年数回開催する「言葉による鑑賞ツアー」と「創作ワークショップ」。今回で17回目となる、創作ワークショップのテーマは「食べて、触って、色を感じる」。とろっ、さくっ、ぱちっ、ざわざわ、ふわふわ、がさがさ。みなさんは、こんな感覚から、どんな色を感じますか？

■日　時：2010年6月20日（日）
■場　所：山科身体障害者福祉会館
■参加者：見えない人・見えにくい人／5名
見える人／10名
（見えない人1対見える人2の、3人1組、計5グループ）

「食べて、触って、色を感じる」というテーマに、それって、どんなことをするのか想像がつかない、いや、おもしろそう、とそれぞれの反応をしめす参加者たちに、まず、アイマスクが配られました。「見える人は、アイマスクをつけてください」という指示のあと、各グループに食べ物が渡されます。

「食べてもいいの？」「どうぞ、アイマスクはそのままですよ」。

がさがさという音が響き、「この箱、どこから開けるの？」「あれ？」。アイマスクをしたまま食べ、その味や、食感について話しあいました。すぐに何色、と言う声が上がっているグループもあれば、うーん、なんだろうね、と探っているグループも。このおしゃべりの時間が、チームワーク作りや、後半の制作にも、プラス効果を上げていたようです。

いちどアイマスクをとり、他のグループの様子も聞いたあと、今度は、モチーフが配布されました。ここでも、見える人はアイマスクをつけたままです。色や手触りについて、一緒のグループの人と話しあい、イメージをふくらませて……。

「やわらかくてあたたかいから、薄い橙色かなあ。暖色系だよね。」

「つるつるしていて、冷たい。銀色が思い浮かぶ。」
「かたい。かたさは、白か黒を連想させるな。」

おなじグループの人同士、頷きあったり、違う、と首を振りあったり。モチーフは、その場で回収されたので、誰もがそのものの視覚的イメージを見ることなく制作にとりかかることになりました。

画材は、ラインテープとカッティングシートです。おしゃべり効果もあってか、皆さん、どんどん手を動かしていきます。また、以前は見える人が「サポーター」として参加していた創作ワークショップですが、今回は見える人も、見えない人も、いち参加者。「サポーター」という位置づけが取り払われたこともあってか、いつもの創作ワークショップよりも、遠慮なく（笑）グループ内でイメージをぶつけあい、ひとつの画面にまとめあげていかれていたようでした。

私たちは、日常生活においては、自分の得意とする感覚が優位になってしまっています。そして、多くの方にとって、それは視覚であると感じられているようです。五感を刺激する、というのは月並みな表現ですが、普段使っていない感覚に集中して、何かを感じることは、世界の新たな見方を発見することにつながります。感じる、ということ、それを伝えあう、表す、ということのおもしろさを実感したワークショップでした。

レポート：井尻貴子

# ざわめきをキャッチするカラダとは？

いのちのざわめきに触れたとき、応えることのできる身体とは、どのような身体なのでしょうか。
そのヒントを得るべく、身体に関わる研究や活動をされているおふたりに、伺いました。

**Question**

Q1．ご自身の研究・活動を簡単にご紹介ください。
Q2．なぜ、そのような研究・活動をはじめたのでしょうか？
Q3．どのような身体の機能、ありかたに注目していますか？

## Answer 弘田陽介

1 社団法人整体協会・身体教育研究所で、日本の古典的な身体文化を学んでいます。日本の身体文化というと、一般には歌舞伎とか相撲というものがイメージされるのでしょうが、そこでは古典的な文化の技芸を成り立たせている人間の身体感覚について様々なアプローチがなされています。どんな間（ま）や度合いなら、気持ちよく人と人が触れ合い、また離れていれるか。そういうことを身体の経験を通して追求しています。

2 元々は小さいときからプロレスラーになりたかったのです。中高、大学と柔道や総合格闘技をしていました。でも背も伸びず、力も弱かったので、何か違うものはないかと思って、武術に興味を持ちました。つまりは超人願望です。それからいろいろ調べ、野口晴哉（1911-1976）という整体の創始者にして、日本の身体文化の巨人に突き当たりました。加えて、大学院でドイツ教育思想を勉強していた頃、アトピー性皮膚炎がひどくなってきていて、病気を克服したいという思いがあったのです。

3 しかし身体教育研究所の所長・野口裕之先生の整体に触れ、超人願望も病の克服も思いっきり否定されました。身体への関わり方は強くなること、健康になること以外にあるというのを知りました。いや、身体に関わるというより、身体そのものが人生の場だというのを学んでいる途上です。それまでだったら気がつかないような本当にささいな感覚も「いいなぁ」と愉しめるようになりましたし、普通は、病んだり治ったり、食や性、何かが上手になったりくらいしか身体で味わえませんが、身体という人生の場を深く味わうことを知りました。

弘田陽介（ひろた　ようすけ）、1974 年大阪生まれ。徳島大学総合科学部人間科学講座助教。社団法人整体協会・身体教育研究所動法教授資格者。教育思想・身体論の研究をしています。著書に「近代の擬態 擬態の近代　カントにおけるテクスト・身体・人間」（東京大学出版会、2007 年）、「鉄道好きの子どもの教育人間学　子どもはなぜでんしゃが好きなのか（仮）」（冬弓舎、近刊）

## Answer 里見まり子

1 私はこれまで、教員養成大学で身体表現やダンスの授業を担当しながら「表現の授業」の内容や指導法について研究してきました。また、「からだで遊ぶ・からだを遊ぶ」「からだの時間」などの公開講座や、美術や音楽や映像のアーティストと協働しながら「五感アート・ラボ」というワークショップを子どもたちや一般の方々を対象に行ってきました。

2 20 数年にわたる「表現の授業」の実践を経て、「日常のからだを捉え直す」ことや「感覚の世界を探りながら遊ぶこと」が、学生たちのからだや動きへの意識を変え、次第にからだとこころを解放して、表現に取り組むからだを育むことにつながるのではないかということがようやく見えてきたように思います。頭の世界を離れて感覚の世界で遊ぶ経験が、豊かな表現につながるのではないでしょうか。

3 例えば「背中でおしゃべり」というワークがあります。日頃は、１本の棒のようになっている背骨の一つ一つを感じながら、ゆっくりと動かしてみるのです。すると背骨が語りはじめます。また、靴をぬいで素足で落ち葉を踏みしめたり、土のうえを歩いたりして足裏の感覚を取り戻し地球とつながってみるとか。手のひらに目をイメージしていろいろなものの表面を眺めてみることも一度ためしてみてください。
日常のレベルを超えて、外の世界に感覚のアンテナを伸ばしながら捉えた手ざわりを丁寧に味わうことが、アートやケアの領域につながるからだの土台をつくることになるのではないかと私は考えています。

里見まり子（さとみ　まりこ）、即興舞踊家、宮城教育大学教授。1980～85 年ドイツ・ケルン体育大学に留学。『演技・音楽・ダンス』の総合課程を専攻し、身体表現の即興による指導法を学ぶ。1986 年より教員養成に携わる。"感覚の覚醒と解放" をテーマに身体表現やダンスの授業を担当。美術、音楽、映像などの他ジャンルのアーティストとの協働によるワークショップやパフォーマンスも行っている。



# 仙台 アートスペース紹介

アートミーツケア学会 2010 年度大会は、仙台にて行います。
仙台といえば、笹かまぼこに、ずんだもち、牛タン、ホヤ・・・
が思い浮かびますが、まちのおいしさはそれだけではありません。
仙台を「味わう」のにぴったりな、五感に働きかけるスペースを
紹介します。

Q1．どんなことが行われるスペースですか？
Q2．どんな人が訪れますか？
Q3．おすすめの味わいかた、楽しみかたは？
Q4．味にたとえると？！
Q5．近々の一押しの予定は？
Q6．仙台のおすすめは？

### せんだい演劇工房 10-BOX
八巻寿文（せんだい演劇工房 10-BOX 二代目工房長）

1 あそびを行うスペースです。10 種類の部屋があり、建物を上空から見下ろすと数字の「１０」に見えるはず。それぞれの部屋(BOX) では、舞台セットを作ったり、演技のために大声を出していたり、ご飯を作っていたり、印刷したり、不思議な仕掛けを試したり、独り踊っていたりしています。

2 演劇の作品を創る人たちが主です。演奏者、ダンサー、パフォーマー、美術家、なにかの撮影、近くの小学生から高校生までの授業、代々受け継がれる大学の卒論の取材、映画や TV の出演依頼、公共施設の事業担当の方も訪れます。

3 人に囲まれて孤独になりたい方。知らない人と話がしたくなった方。表現やオブジェを作ってしまったものの感想が聞きたい方。非日常の日常が見たくなった方。

4 多様性と混沌を味にしたら、仙台雑煮かな。具材や味が家庭によって違うけれど、地域的に俯瞰してこんな感じともいえる。「ハレ」を作るところだし。

5 「杜の都の演劇祭」です。仙台市街の素敵なカフェや飲食店で「ものがたり」を楽しみ、おなかもこころも温まってください。
http://www.morigekisai.com

6 ぜひ「杜の都の演劇祭」へ。

### 仙南芸術文化センター（えずこホール）
水戸雅彦（えずこホール所長）

1 えずこホールは劇場です。話題の演劇の上演や、アーティストのコンサートを行います。また、音楽、演劇、ダンスなどさまざまなアートを身近に体験できるワークショップを開催するほか、学校や福祉施設への出張プログラムも展開しています。ホワイエでは毎月１回親子むけの遊びの広場を開きます。

2 小さなこどもたちからお年寄りまで、鳥やへびもときどき遊びに来ます。

3 おもちゃ箱をひっくり返したようなところです。新しいおもちゃもガラクタも、想像力と創造力があれば最高の感動体験に生まれ変わります。いきいき、わくわく、うきうきする旅に、ご一緒しませんか？

4 闇鍋かな（笑）。「へー、こんな味があるんだ」という新しい発見に出会ったときの味わいは格別です。でも「これはいったいなんなんだろう」という味との出会いも、実は人生の隠し味としてすごく大切なんだと思います。

5 どれかひとつといわれると困ってしまいます。たくさんあるメニューの中からお気に入りの一品を見つけていただければ幸いです。

6 仙台の南、亘理町の名品はらこ飯をご紹介します。鮭の炊き込みご飯にいくらがどっさりのってそれはもう素晴らしい秋の味覚です。どこかで見かけたらぜひご試食あれ。

### ハート＆アート空間 "ビーアイ"
関口怜子（ハート＆アート空間 "ビーアイ" 代表）

1 ホモ・ファーベル、ホモ・ルーデンスを体まるごと実感するところ。言い換えるなら見る・聞くをベースに五感を大切にした創造表現をする空間。午前中雨だった今日のＩ－３クラスは臨機応変で西公園に様々なスティックを持ってあちこちたたいて音を楽しむ遠足に。
一人一人が自分として丁寧に生きココロ筋肉マンを目指しています。

2 会員は１歳半ぐらいから大人まで。お客さんも常連さんからビーアイの卒業生、お茶のみ人、地域も遠方・海外と十人十色。千客万来。

3 ぬるめの温泉に入るように、そーっとゆっくりつかるのがいいかな。何かを教えてもらうとかでなく、心からっぽにして一緒に楽しませてもらう流儀かなあ。イキモノ同志だからね。

4 丁寧にだしをとった感じのあの味。どんな味付けにするかはあなた次第。
今年の１月、ビーアイ風雑煮をしたとき、本格的なだしをとってお澄まし風を食べた子ども達の一声。「これは料亭の味だ！」と。行ったこともないのにね。

5 日常が大事。いつでもどうぞ！！
12 月３週目は年に１度のＩ-Ｉ（アイアイ）パーティー。

### せんだいメディアテーク
甲斐賢治（せんだいメディアテーク企画・活動支援室室長）

1 日々、3000 人が本を読み、映画を観て、展覧会を楽しむ。
飽き足らない人たちは、パソコンの使い方を学び、映像を編集し、活版印刷に臨み、わいわい哲学を語る。
挙句の果てには、仲間を集め、年を通じ活動し、その成果を発表したりもする。そんなスペース。

2 概ね、あらゆる人。

3 本＝７冊を２週間借りる。お金はいらない。ご安心を。
アート＝観たことのないものを楽しむ。
スタジオ＝仲間を集め、相談し、使いたいように使う。
建物＝世界で唯一の特殊な建物。さて、なにが？

4 一見、アフタヌーンティー。実は昆布、あるいはビーフジャーキー。

5 一連の 10 周年事業。展覧会、アートプロジェクト、ワークショップ、アーティストトーク、上映会、連続トークセッションなど、花盛り。

6 メディアテーク正面向かい「井上」。
平日ランチが栄養満点。暮しの手帖的キッチンが美しい。
定禅寺通り 東京エレクトロンホール宮城 2 階「東龍門」。
昭和漂う中華。smt 社員食堂（俗称）。

# アートミーツケア学会　入会のご案内

**会員を募集しています**

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

## 事業案内

1. 大会の開催
   講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。
2. 調査研究の推進
   「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。
3. 学会誌の発行
   アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。
4. ニュースレターの発行
   日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。
5. フォーラム、シンポジウムの開催
   特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。
6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
   ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。
7. 国際交流の推進
   アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

## 申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
   入金先　アートミーツケア学会
   口座番号　00920-4-252135
2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。
3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

## 会員種類・年会費

□個人会員　一般10,000円　学生5,000円
□賛助会員　30,000円

## 役　員（敬称略）

□会長　鷲田清一（大阪大学総長）
□副会長　畑　祥雄（関西学院大学教授）
□常務理事　播磨靖夫（財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事　秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事　坂倉杏介（慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特別研究講師）
理事　塩瀬隆之（京都大学総合博物館准教授）
理事　志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-Dプロジェクト）
理事　鈴木理恵子（女子美術大学非常勤講師）
理事　関口怜子（ハート＆アート空間ビーアイ代表）
理事　ダーリング・ブルース（美術史家）
理事　銅金裕司（メディアアーティスト）
理事　中川　真（大阪市立大学院文学研究科教授）
理事　並河恵美子（NPO法人芸術資源開発機構代表）
理事　野津　亮（大阪府立大学助教）
理事　日野陽子（香川大学教育学部准教授）
理事　本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／文学研究科准教授）
理事　的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
理事　水野哲雄（京都造形芸術大学子ども芸術学科教授）
理事　見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
理事　三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
理事　森口ゆたか（NPO法人アーツプロジェクト代表）
理事　山口悦子（大阪市立大学医学部付属病院安全管理対策室専任医師）
理事　横川善正（金沢美術工芸大学教授）
□監事　太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
監事　三浦久子（株式会社エイジレスラボラトリー会長）

## いのちの手ざわり　アートミーツケア学会　2010年度総会・大会

■2010年12月11日（土）～12日（日）
■せんだいメディアテーク7階　スタジオシアター他

■12月11日（土）
・講演「生きることを支えるアート」
　志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-Dプロジェクト、アートミーツケア学会理事）

・分科会
　A.『見る』ことを超えて
　B. いのちをささえるアートのかたち
　C. 公共文化施設の公共性とは何か
　　21世紀社会デザイン研究学会
　　ジョイントセッション
　D. からだの感覚の世界を探る
　　―ダンスワークショップ―
　E. メディアテークでみみをすます
　　―サウンドスケープワークショップ―

■12月12日（日）
・プレゼンテーション
・哲学カフェ ～いのちをおくる～
・ディスカッション「いのちの手ざわり」

＊お申込み・お問い合わせは、アートミーツケア学会事務局までお願いします。

### 編集後記

●せんだいメディアテークで開催する今年度大会まで、あとわずかとなりました。東北の地で、アートとケアが交差する場をつくり、育て、時に掻き混ぜているみなさまにお会いすることを楽しみにしています。みなさま、ぜひご参加ください。（井尻）
●毎年、大会では、ふだんはなかなか会うことのない会員のみなさまをはじめ、いろいろな人とお話できるのが楽しみです。ぜひ、お声かけくださいね。（森下）


**アートミーツケア学会ニュースレター**
Vol.7　2010年11月20日発行


発行　アートミーツケア学会　http://popo.or.jp/artmeetscare/
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4　財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501　E-mail.art-care@popo.or.jp